Ⅴ　研究の成果と課題

１．研究全体について

①研究主題・サブテーマ・仮説は適切であったか？

○適切であった。（同様の意見　３）
○「自ら考えよく学び」→自分が持っている英語に関する情報を充分に使っていた。
○「生き生きと活動～」→「英語が好き」の子が 100 %になり，目標を達成できた。
○体験的な学習とコミュニケーション活動を多く含む英語の実践は，その活動を楽しみにしている姿をみると，生き生きとした児童を育てる根本的なものになっている。
○特にコミュニケーション活動の場の設定を意識したことで，授業のねらい等も明確になったのではないかと思う。
○主題，サブテーマについては，昨年度までの継続，広がりということで良かったと思います。仮説については，視点を絞り，とてもわかりやすかったと思います。
○本校のやりかたに合致していた。取り組みやすかった。
○時代の要請に沿った研究で，本校児童に対応した内容になっていたと思います。無理なく充実した研究だと思う。

【考察】

研究主題，サブテーマともに，これまでの本校の研究の積み重ねや本校の子どもたちの実態，時代の要請に合致したもので，適切であったと言える。仮説については，「子どもたちの興味・関心を生かした内容」と「英語を楽しく聞いたり話したりする（コミュニケーション）活動の場」を工夫することに絞ったので，ねらいが明確になり，研究に取り組みやすかった。

②研究内容・研究方法・研究組織・研究計画は適切であったか？

○適切であった。（同様の意見　１）
○２学期の自主公開が本当にお互いの授業を見合い，研究できた。（公開は見合うことができなかったので。）
○今年度最大の公開発表会に向けて，必要な研究内容・方法・組織・計画だった。
○内容は，やはり公開に向けて，公開中心であってよかったと思います。方法も組織もよかったと思います。計画も研究主任が見通しを持って立てていただきありがたかった。
○ブロック長の先生に助けてもらえ助かった。（ブロック内で話し合いができて良かった。）
△研究組織は全部は機能できなかったが，小さい学校でお互いにダブっていて，それを上手に生かすことで組織として協力できたように感じる。
△前年度のうちにやっておいた方がよかったことがあったため，今年度は公開まで忙しかったが，何とかやり遂げられてよかった。その他はよい。
△必ずしも組織が十分活用されていたとは言えないが，年頭に組織化されていたことは良い。
△研究副主任を設定すれば良かった。例年なら良いが，今年度は公開があり，研究主任の負担が大きかったと思う。

【考察】

今年度は，「公開研究発表会の実施」が最大の目標であった。したがって，公開へ向けて必要な研究内容・方法・計画を中心にしたことは適切であった。しかし，計画については，６月公開という忙しい日程を考えると前年度からもっと計画的に準備を進めるべきであった。また，組織については，十分に機能しない組織もあったので再考を要する。少人数にもかかわらず「ブロック研究」と「機能別研究」の二つを組織してスタートした。「ブロック研究」については，

指導案検討などで有効に機能していた。一方，「機能別研究」については，計画の大幅見直しを行った昨年度は有効に機能したが，今年度は機能しなかった。「ブロック」「機能別」双方に全職員が重なって組織されていることを考えると無理があった。

③校内研究会の持ち方は適切であったか？

○適切であった。（同様の意見　４）
○多忙の中でも，定期的に研究会を開くことができた。
○多すぎることもなく，ちょうど良い回数であった。
△校内研の基本は授業にあるので，自主公開時のように職員全員による①指導案の検討②授業③反省の流れは大事にしたい。
△指導案検討の時間がとれないとき（校内での小公開？）があったが，日程が厳しかったので仕方ないか・・・。（できればとりたい。）
△時間的には無理な日程もあった（授業研・自主公開等）が，先生方の意欲と情熱で上手にやりくりできた様に感じる。

【考察】

多忙な中，回数的には適当であった。しかし，公開研究発表会や自主公開の実施に向けては，各ブロックごとに臨時の研究会を行うことも多くあり，多少厳しかったことは否めない。現在の研究会の回数を維持しつつ，見通しを持って内容を充実させることが必要であった。そうすれば，職員全員による指導案の検討→授業→反省という流れを保つことができ，より研究が深まったと思う。

２．授業研究について

①授業研の組織や回数は適切であったか？

（本年度は，公開研究会と自主公開の２本を全クラスで行いました。）
○自主公開については，話し合う時間もあり研究が深まった。
○学担以外の先生にもたくさんのアドバイスを頂き助かりました。
○大変だったと思いますが，すばらしい授業で，成果も大きかったように感じる。
○公開もあったので全クラス２回はよくがんばったと思う。（成果も上がった。）
○自主公開は無理してでもやって良かったと思う。（公開とはまた違う形での授業も組んでみることができたので。）
○６月の公開に向けて充実した研究への取り組みだった。尻すぼみにならずに自主公開も行えて良かったと思う。
○公開研究と自主公開，ご苦労様でした。公開が６月，したがって研究推進のために自主公開は自らの研究に役立ったと思う。
○通常で考えると年間全クラス２本，場合によっては３本という数は多いと思う。今年度は公開があったためということだと思う。
○公開研究会の後，各クラス自主公開ということで本当にご苦労様でした。すべての授業を一通り見せていただきました。大変だったと思いますが，よかったと思います。
○２本立ては大変でありましたが，勉強になった。
△公開の際は，他学年の様子が人から聞いた話だけでわかりずらかったが，自主公開もあったので雰囲気や実践の様子もわかり良かった。
△自主公開を参観する方は良かったが，行う方の立場としてはどうだったか？

【考察】

６月公開，さらに公開の反省を生かして２学期に自主公開を行った。全クラスが研究授業２

本は異例であり，大変ではあった。しかし，特に自主公開を行ったことで，全職員で互いの授業を見合う（公開では見合うことができなかったので）とともに反省の話し合いもできたので，より研究を深めることにつながった。また，「わくわくイングリッシュ小学校サポート事業」の指定校として，広く地域に公開する機会を２度設けることでその役割を果たすことができたと考える。

②研究主題の達成度について

（授業中の子どもたちの姿，あるいは振り返りカードの記入内容などから）

○英語に興味を持った子が増えた。子どもたちが英語を発音することに何の抵抗も持っていないことが大きな成果であった。
○良かったと思いますが・・・。
○ほとんど子どもたちは英語活動を楽しく感じており，コミュニケーションをとろうとする意欲も十分見られた。
○特に自主公開の授業を見たときに研究の成果が表れていると感じた。
○子どもたちは英語活動で生き生きと活動することができていた。それは，活動の内容や場を工夫したことによる。だから，研究主題は達成できたと思う。
○子どもたちは，生き生きと活動していたと思う。
○子どもたちの姿から大変良かったことがうかがえる。
○英語への取り組みは意欲的であった。様々な活動を通して，楽しく英語に親しめたと思う。
○振り返りカードはやはりあると今後に役立つ。
△子どもの調査が必要。

【考察】

英語活動に対する子どもたちの様子を見ると，英語にあまり抵抗を持たず，楽しく生き生きと活動していたので，研究主題は達成できたと考えられる。ただし，振り返りカードや実態調査など子どもたち自身の評価も重ねて分析する必要がある。

③この研究や日々の実践を通して，英語活動についての理解が深まったり，授業に対し，見通しが持てるようになったりしただろうか？

（「学級担任主導の授業」「ＡＬＴとの役割分担」「コミュニケーション活動を仕組む」「Classroom English の活用」といった共通理解事項も含めて。）

○教師も子どもたちも英語の授業になると違う意識を持ち，新鮮な気持ちになる。
○普段とは違う自己表現ができる子が出てきた。
○授業研も行くのが大変なときもあったが，より多くの例を見る中で自分の授業へのイメージをたてやすくなった。
○積み重ねてきたものがまとめとして文章化されたときに，今後自分が他学年の英語活動をするときにも大いに役立つ資料になると思う。
○今年度の研究の中で英語活動についての理解を深めることができた。授業に対してもある程度の見通しがもてるようになった。
○西小の研究はかなり進んでいたので，わかりやすく，取り組みやすかったと思う。
○授業に対しても，指導計画や資料，他の先生方の授業見学により，見通しが立った。
○英語を使ったコミュニケーションが大事ということを認識できたことは良かった。
○１時間の流れが子どもたちにわかっていたようで，前向きに取り組む姿が見られた。
△難しいのはコミュニケーション能力を高めることだと思うが，このことについてはもう少し今後検討してみると良いのかもしれない。あとはとっても充実していたのではないだろうか。確立もできているように感じる。

△英語活動についての理解が深まったが，深さも感じ，指導法やポイントが現在の継続でよいのか不安もある。（英語ノートの利用法，他校との流れの違いはどうか？）
△今後，英語活動における「コミュニケーション活動」について理解を深めたい。

【考察】

自らの実践を重ね，また互いの授業を見合うことで，英語活動について理解を深めることができた。そして，「学級担任主導の授業」「ＡＬＴとの役割分担」「コミュニケーション活動を仕組む」「Classroom English の活用」といったことを含む本校の英語活動における授業の流れを全職員が共通理解することもできた。よって，授業をする際にイメージが湧き，計画も立てやすくなってきた。しかし，来年度以降は他校でも本格的に英語活動が行われていくこと，また英語ノートが配布されることを考えると，本校の英語活動を継続していくことがいいのか，他校との兼ね合いも考えていくべきなのかを検討する必要がある。さらに，今年度力を入れてきた英語活動における“コミュニケーション”について，そしてそのコミュニケーション能力を高めるための手段や方法等について研究をしていくことも忘れてはならない。

３．本年度の成果と課題について

①成果

○ Classroom English が増えた。
○英会話（英語でのコミュニケーション）をすることに子どもたちが慣れてきた。
○「英語ノート」の活用法が少しわかった。
○担任も英語を学ぶことに意欲がもてた。
○長い研究の積み重ねを本年度公開という形で他校に発表できたのは大変有意義でした。また指導主事の先生方や他校の先生方の言葉がとても参考になりました。
○１～６年生までの授業を参観する中で，１年ごとに英語に対する子どもたちの参加の様子や英語を話す子どもの姿を見るにつけ，成果を実感できた。
○たくさんの実践研究の中で，子どもたちの能力は確かに高まり，嫌いにならずに意欲的になったことは大きな成果と言える。それは，職員の能力の高さと同じではないかと思う。共に学び合った成果が大きい。
○実践を積み重ねることでいろいろな指導法や流し方に触れることができて，今後に生かすことができる。
○ HRT が主となって行う活動が，いろいろなパターンとして見えてきた。（実践の中でも，計画の中でも。）
○ ALT のいいところも生かしつつ，学担主導での授業が組み立てられること。（もちろん進められること。）
○今までの研究の積み重ねがあり，本校の研究には中味が濃いと思う。指導の仕方に先生方，自信があり？自信をもっていいと思う。
○公開研究会が無事終えたことが，一つの大きな成果だと思う。
○お互いの授業を見合い，英語活動への理解が深められた。
○教師自らが英語活動に対してオープンになり取り組めば，子どもたちも意欲的になり自ら活動することができた。
○公開・自主公開と授業をする中で，授業の流れの見通しがもてるようになった。

【考察】

英語活動に関する長い研究の積み重ねを『公開研究発表会』と『自主公開授業』を通して発表することができた。そんななか，我々教師自身も多くの実践を重ねることで，「学級担任主導」の授業の組み立てや指導法，「ALT との役割分担」，「Classroom English の活用」

など“本校なりの英語活動”への理解を深めることができた。また，授業を参観してくださった先生方からたくさんのご指導をいただき，それをもとに研究を前進させられたことは今年度の大きな成果と言える。

そして，教師も子どもたちも本校なりの英語活動にだいぶ慣れてきた。よって，英語に慣れ親しむための“楽しい活動”や“コミュニケーション活動”に余裕を持って取り組むことができ，心を開いて意欲的にコミュニケーションするようになってきたことも成果と言える。

②課題

・ALT（Tegan）との授業の計画の見通しと役割分担。
・「英語ノート」と「西小の教育課程」の関わりをどの程度にするか。
・英語のスペルの掲示は，少しずつしていった方がよいのでは！！（昨年は「掲示すべきではない」との見解。）
・既存の授業案は大雑把なものなので，ALT と担任同士でいいアイディアを出し合い，そのまま行うのではなく，今教室にいる子どもたちの実態に合わせたものにしていくことを確認したい。
・英語におけるコミュニケーションの本質について，もう少し深めたいと思う。
・地域の学校への広がりについて，今後具体的に試みることもありうるかもしれない。
・全国的（県内・市内）に英語ノート中心の指導になることが予想されるが，本校が目指す方向性を再確認していく必要がある。
・評価の仕方について，学校として（他校の例をもとに）どうしていくかを考えていく。
・英語ノートの活用が見えてきたが，英語ノートはどの程度の部分を扱えば良いものなのだろうか？
・コミュニケーション活動がたくさんできるように仕組まれたゲームをできるようにしたい。（が，ねらいをはずれないようにしたい。）
・言葉での会話を大事にしながら，言葉だけにとらわれず，友達とコミュニケーションする楽しさを知らせていきたい。
・英語活動のカリキュラムを来年度適切にこなし，レベルアップを図ることが大切である。
・子どもたちは生き生きと取り組んでいたが，うっかりするとゲーム自体を楽しんでしまう。また，英語活動はゲームをするから楽しいという感想も多く見られる。ゲームは手段であるが，その手段の持つ楽しさに頼っている部分も大きい。英語活動の本質をとらえ，その本質にふれる楽しさを多く味わえるようにしたい。
・授業で使ったものの申し送りと整理をして，次年度に使いやすいようにしたい。

【考察】

研究を重ねるなかで，発達段階や系統性を考慮した各学年の指導計画を作成し，１時間の授業の流れを共通にするなどして“本校なりの英語活動”を確立しつつある。しかし，来年度以降は全国の小学校で（５，６年を中心に）英語を中心とした外国語活動が本格的に始まる。それに伴い「英語ノート」が配布され，英語ノート中心の指導をする学校が多くなるであろう。また，ALT との授業に際しては事前に打ち合わせを設けているが，その際には子どもたちの実態や ALT のアイディア等を合わせ，計画が大幅に変わることもある。そこで，英語ノートをどの程度扱うのか，本校の計画をどの程度まで実践していけばよいのかを年度当初に共通理解しておく必要がある。また，今後，英語ノートに合わせた計画にするなど指導計画を見直していくのかも検討しなければならない。

さらに考えなければならないことは，英語を中心にすえた“コミュニケーション”をどう仕組んでいくかである。本校では，歌やゲーム，チャンツなどを通して楽しく英語に慣れ親しま

せるようにしている。さらに，短い時間の中で，少ない言語材料を使い，ゲームで楽しむだけではない，より実際に近いコミュニケーションができるようにし，コミュニケーションすることの喜びや楽しさを味わうことができるようにするにはどうしたらよいのか，研究を重ねていく必要がある。それが，コミュニケーションを図ろうとする態度を育成し，コミュニケーション能力の素地を養うことにつながるからである。

◊児童実態調査より◊

「英語活動が好き・どちらかというと好き」　＝　９１．４％
「英語活動が嫌い・どちらかというと嫌い」　＝　　８．６％

という結果からわかるように，子どもたちは英語活動を楽しみにしている。その理由として一番多いのは『楽しく活動できるから』である。特に『ゲームが楽しい』という答えが最も多いことは１学期と変わらない。よって，子どもたちは，楽しみながら英語に慣れ親しむことができたと言える。

また，３学期の調査では新たに『英語を話せた・話せるとうれしい』『普段見えない友達の様子がわかる』という答えがあった。今年度の研究で大切にしてきた“コミュニケーション活動”の成果の表れではないだろうか。教師と子どもあるいは子ども同士でコミュニケーションをとること，しかも英語を媒介にしたコミュニケーションをとることで，子どもたちはコミュニケーションすることの楽しさや嬉しさを感じることができたのであろう。また，そのコミュニケーションを通して，子どもたちが友達の新たな面を発見できたことは価値がある。

しかし一方で，『発音が難しい』『何を言っているかわからない』といった子どもたちに対する有効な手立てを研究していく必要もある。

「楽しい（好きな）英語活動」「心に残っている英語活動」もやはり『ゲーム』が多数を占める。そんななか，公開発表時あるいは自主公開時の活動が楽しく心に残っているという回答も目立つ。時間をかけ，工夫と準備を重ねた成果の表れであろう。

「英語活動をしてよかった（役に立った）こと」は低学年と高学年で回答が分かれている。低学年では『英語をいっぱい教えてもらえて言えるようになった』『動物や色など新しい英語を覚えられた』と英語を獲得できたことが喜びにつながっている。一方，高学年では『外国人と会話ができた』『パソコンを使うとき役立った』『ニュースで英語が流れているのを聞くとたまにわかる』など，学校での英語活動が日常生活の中で実際に使えることによって喜びを感じているようである。よって，これまで通り「日常生活に根ざした題材」を扱いながら，「実際に外国人と話す機会」をより多く設けることが英語活動のさらなる充実につながると考える。

４．来年度に向けて　（２月２５日の全体会より）

今年度までの研究を生かしつつ，子どもたちにつけさせたい力を考え，さらに新学習指導要領にも対応できるように研究を重ねることが確認された。

①「英語活動」に関わる研究は継続する。
②「言語活動」を中心としたコミュニケーション能力を育成する研究も行う。